

キリストの光のキリスト

年間第29主日 10月19日(世界宣教の日)
(マタイ22・15-21)

教会はバラバラになつてい
ような気がする。丁寧な言葉で言
えば、教会は多様化しすぎている。皆、それぞれに「大切なこ
と」を主張し、それぞれが主張
することが「二番大切なこと」と
思っている。それを理解しない人
を理解しようとしなさい。何よりも
それでよしとしている。：やはり
：バラバラ…。

「多様性の一致」という言葉、
考え方がある。教会に当てはめ
ていわれることでもある。確かに
カトリック教会の特性は多様性
にあると思われる。だが、その多
様性はどの点で「一致」している
のだろうか。

教皇ベネディクト十六世は、
福音宣教は「何を置いても優先

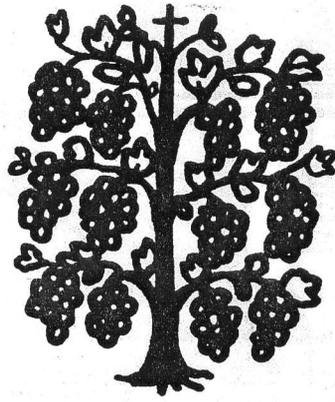
教会に愛がある？

すべきことがら」だと「世界宣教
の日」のメッセージで言っている。
「キリストとその救いのメッセー
ジを告げ知らせることは、あらゆる
人にとってすぐにでも取り掛か
らなければならぬ務めなので
す」。さらに、キリストの愛から
のみ「配慮、優しさ、思いやり、
受容、人の役に立つこと、人々の
抱える問題に関心を寄せること
を引き出すことができます」と。
教皇ヨハネ・パウロ二世は
「わたしたちはこの使命を果たす
ために、全力でかわらねばな
らない」と言う。

教皇パウロ六世は使徒的勧告
『福音宣教』の中で「教会はま
さに福音をのべ伝えるために存
在しています」と言う。さらに

「すべての人々に福音をのべ伝えることが教会の第一かつ本来の使命である」と。

このような歴代教皇の言葉や、何よりもイエス自身の言葉



を思い起こす時、教会の存在目的は「福音宣教」であり、そのすべての行動原理は「愛」であることがはっきりする。教会の多様性は「福音を告げる」

「福音を宣言する」「愛に生きる」ということで一つにくくられるのではないだろうか。そのように考える時、今の教会はその本来の使命からあまりにもかけ離れているように見えるのである。

教会を人と人とのかわりで見ると、そこには福音とはあまりにもかけ離れた現実がある。非難、中傷、悪口、無理かい、無関心、差別、排斥、権威主義、自己中心、おごり、怒り、憤り、言い訳、嘘…。何よりも「優しさ」に欠けた現実がある。そのような「仲間」の中心にキリストがいると言えるだろうか。

福音は「証し」をもって拡

つていく。

どんなに教皇が声を大にして叫んでも、美しく強い言葉で呼び掛けても、今ある教会に「愛」がなければ、宣教の使命を果たすことはできない。

「どうぞ、わたしたちの教会に来てみてください」と言える教会でなければ…。
ただし…謙虚な心で。

(山元眞＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子)

今週の福音

20日・月ルカ	12・13	—	21
21日・火ルカ	12・35	—	38
22日・水ルカ	12・39	—	48
23日・木ルカ	12・49	—	53
24日・金ルカ	12・54	—	59
25日・土ルカ	13・1	—	9